第五章　伏帝匐・承宗・伏帝難の時代

舊唐書及び册府元龜によれば、獨解支の後、伏帝匐・承宗・伏帝難の三人相繼ぎて酋長となれり、新唐書回鶻傳及び唐會要にも、獨解支の子伏帝匐、伏帝匐の子承宗が相繼ぎしことを記せり、[四一] 伏帝匐の在世は證聖元年、若しくは開元三年以後、[四二] 開元七年（七一九年）に及びたるものなること唐會要[四三]卷九十八及び册府元龜卷九七四 褒異篇に見ゆ。承宗は其の後を受けて開元十五年（七二七年）に及び、同年伏帝難の繼ぎしこと後に述ぶるが如し。

獨解支の南徙後、此等の數代の間は、同様に甘涼地方に在りて唐に屬し、而して尚從來の瀚海都督の號を受けたるものなること、舊唐書廻紇傳に「永隆中獨解支、嗣聖中伏帝匐、開元中承宗、伏帝難、並繼爲酋長、皆受都督號」と記され、又兩唐書王君㚟傳に、承宗を呼びて「瀚海大都督回紇承宗」と稱するに見るも明かなり。偖て新唐書回鶻傳には伏帝匐は其の部酋となりし翌年、唐を助けて突厥の默啜を殺したりと記さるれども、之につきては次篇[四四]に述べたるが如く、若し回鶻が此の際力を盡したりしものとすれば、伏帝匐の下に在りし河西の回鶻にはあらずして、寧ろ他の部酋の下に北方に殘留したる別部なりしなるべし、而して默啜の殺され、默棘連可汗の繼ぎ立つや、可汗は直に復仇の師を Selenga 河地方に進め、鐵勒諸部を擊ちたるを以て、此の別部も亦新たに諸部と共に唐に來歸するに至りしものなるが如く、突厥碑文に此の際 Uiγur[四五] の iltäbär は數百人と共に東方に〔逃れたり〕と記せるは、恐らく新唐書回鶻傳に「於是別部移健頡利發 (irkin(?) iltäbär) 與同羅・霫等皆來、詔置其部於大武軍北」[四六] と記せるものと、相應ずるものなるべし。